

R. Browning の絵画詩：*Fra Lippo Lippi*

—アガペーとエロースから見た倫理観と芸術観—

野 口 忠 男

1. はじめに
2. 作品の構成について
3. Lippi の絵画への開眼と苦悩
4. アガペーへの信念とエロースの追求
5. 芸術観と倫理観の融合
6. おわりに

1. はじめに

Fra Lippo Lippi は、絵画を主題にして Browning 自身の芸術観を述べたものであると解することが出来る。Browning の芸術観を考えると、彼のこの作品中には、芸術的な観点と倫理的な観点が、織りなされていることに気付くのである。⁽¹⁾ Samuel B. Southwell は、*Quest for Eros* の中で、本詩の宗教的な核心に触れて、まことに示唆深いことを述べている。*Fra Lippo Lippi* と *Saul* には、ともに“the love of the world”「現世の愛」と“the love of God”「神の愛」が内包されていると述べている。さらに *Saul* での愛の運動の方向は、“the flesh to the spirit”「肉体から精神」へ向うものであり、*Fra Lippo Lippi* においては、“the spirit to the flesh”「精神から肉体」へ向うものであると説いている。この“the spirit to the flesh”とは、いかなる意味内容を表現しているものであろうか。

この問題を愛と美の視点から眺めた場合、それぞれ神の愛アガペーとプラトンの追求した愛⁽³⁾エロースとして捕えることが出来ると思える。私

は、この小論でアガペーとエロースが、本詩の中でいかなる関係を形成しているかを考えてみたい。この関係を、美として最も深い意味において把握したものが、Browningの芸術観—宗教的なものと美的なものとの融合とすることが出来るのである。

Browningがこのアガペーとエロースの愛と美の詩世界を、Lippiに託して追求する意図を考えてみる必要がある。幾多の要因の一つには、19世紀ヴィクトリア朝人の腐敗し衰弱しつつある偽善的な近代精神の崩壊の徴候が、蔓延していたと思われる。M. アーノルドは『教養と無秩序』の中で、この偽⁽⁴⁾瞞的な“some lasting truth to minister to the diseased spirit of our time”「我らの時代の精神的な病いをいやす永久的真理」を模索し、“an importation of Hellenism into Hebraism”「ギリシア主義のヘブライ主義への移入」に、解答を求めたことはよく知られていることである。Browningも M. アーノルドのごとく、二大精神の根本的意義を問い、芸術のための芸術を超克する“aesthetic and religious opinions”「芸術観と宗教観の理論」による、有機的にして生命的本源的な関係の中に、魂の救済の“lasting truth”「永久的真理」を探ったと言えるのである。

2. 作品の構成について

本詩を理解する一助として、本詩の内容を時間的視点から考えてみる時、六部から形成されていると考えられる。

- 第一部 1行—79行（現在）、Lippiの警察の頭に対する自己弁護。場面は夜半過ぎの色町の路地。
- 第二部 80行—246行（過去）、不幸な生い立ち・修道院内での絵画修業（中世の芸術観とLippiの芸術観の対立と苦悩）。
- 第三部 246行—269行（現在）、Cosimoの家から、色町へ出て来た経緯。Lippiの写実主義的芸術論主張。
- 第四部 270行—343行（現在と未来）、当時の人々に対しての芸術論。弟子と彼の死後への不安と疑惑。
- 第五部 344行—389行（未来），“Coronation of the Virgin”作成への芸術的な信念。

第六部 390行—392行 (現在), 現実への回帰と未来への光明。

以上のことから、本詩は現在を中心にして、現在→過去→現在→現在と未来→未来→現在と、回想されたり未来へ渡ったりして、かなり時間が交錯していることがわかる。しかも、円環的な時間だけでなく垂直的な時間が加味され、作品を立体的に動的にしているのである。

時代背景について考えてみれば、中世のカトリック教会を中心とする精神的な秩序が崩壊の様相を深めていった15世紀の初頭である。つまりホイジンガの言葉を借りれば、「中世の秋」からルネッサンスへかけての、新しい精神の胎動期である。この黎明期の意味することは、一般には古典古代の学芸に学び、人間中心のギリシア精神を復興させることであると考えられている。さらに、15世紀には、東ローマ帝国が滅亡したために、ビザンチンの学者達がイタリアに移住して来た。その結果プラトン主義の復興が行なわれ、エロースの果す役割が重要視されて来たことは、崩壊へ向う中世精神へ新生命を与えるものとして無視することは出来ないと思える。

本詩の場面は新しい精神の開花に相応しくイタリア・ルネッサンスの中心をなした都市フローレンスである。目下豪族メディチ家のコジモ(1389—1464)が君臨している。季節は春、時間はカーニバルの真夜中過ぎから、暁の明星が輝き出すまでのほんの数時間である。黎明期のルネッサンス、フローレンス、春、暁の明星が、それぞれ暗示する意味は、本詩の時間空間の frame として重要な役割を果していると思われる。⁽⁵⁾ *Andrea del Sarto* では、ルネッサンスの黄昏時における部屋の中で、Sarto と愛人が官能的なエロースに囚われているのとは反対に、*Fra Lippo Lippi* では、個人的な時間と空間だけでなく、水平的にも垂直的にも開かれた光明の世界へ向っていることが理解出来るのである。

この開放的な構造は、後で述べる Lippi の愛についても言えることである。Lippi は色町からの帰りに、夜警の警官に捕えられる。彼は“dramatic monologue”「劇的独白」の形で、警官の頭を相手にきわめて軽快な口調で、stornelli つまり“flower-songs”を混えたりして、巧妙な手管で彼を説得する。この時自己の幼少年時代の悲惨な体験と芸術観と倫理観を語るのである。私達は彼の語り口から彼の人間性を読み取ることが出来る。

彼は⁽⁶⁾ C. H. Herford が述べるように“vigorous human creature”「生命力あふれる人間」で性格は DeVane によれば，“cheerful”「陽気で」樂觀的であり、しかも Wordsworth のごとく“sad music of humanity”「悲しい人の世の音楽」に見られるように、弱者への“sympathy”が感じられる。さらに純真な無垢性と自然性、不屈の精神を感知することが出来る。美術史家 Vasari が述べるように、⁽⁷⁾ “the pleasure of sense”「感覚的快樂」の追求者でもあったのである。Lippi を取り巻く登場人物—警察とその頭、修道院僧とその院長、Cosimo of the Medici とその家臣達は、すべて中世の規制に拘束されたヴィジョンを見ることの不可能なインサイダーであると言えまいか。私達は Lippi に、環境を超越する創造的なヴィジョンを持つ内面性を求めることは無理なことであろうか。

3. Lippi の絵画への開眼と苦惱

Lippi は幼き日に両親に死なれ，“fig-skins, melon-parings, rinds and shucks, / Refuse and rubbish” (ll. 84-5) 「いちじくの皮、メロンの食べ残し、果物や豆の皮、屑の残物」で、飢えを忍んでいた。この孤独で悲惨な幼児体験から、Lippi が本能的に獲得した人間や社会への見方は、彼の愛と美の認識の深部を形成していると言える。“a beast” (l. 80) 「獣」のごとき生活から、Lippi の魂と感性は鋭く磨かれることになる。

Why, soul and sense of him grow sharp alike,
He learns the look of things, and none the less
For admonition from the hunger-pinch. (ll. 124-6)

彼が、生きるか死ぬかの“hunger-pinch”の体験から獲得した本能的で鋭敏な感性は、彼が後に世界の根源を直視する際に、重要な意味を持って来るのである。

彼は8歳の時、Carmine の修道院に父の伯母によって入れられる。彼が修道院の生活に入ったのは、神に仕えると言うものではなく、“the good bellyfull, / The warm serge” (ll. 103-4) 「お腹はいつも満腹、あたたかいランチャ服」から想像されるように、以前の飢餓の生活と較べると、物質的にはるかに恵まれた世界であったからである。飢餓は満たされたも

の、彼は神聖な世界であるべきはずの修道院の精神的な生活に対して、“the worldness of the church” 「修道院の世俗化」を痛烈に風刺している。例えば、冒頭で Lippi が警察の頭に語る言葉、“Whatever rat, there, haps on his wrong hole, / And nip each softling of a wee white mouse” (ll. 9-10) 「どの鼠も悪い穴にもぐり込み、小さな柔らかい白鼠をつかまえなさい」は、退廃的で世俗化された官能の世界を暗示していることが出来る。“wrong hole”は、⁽⁸⁾“vulva”のイメージを含み、“mouse”は⁽⁹⁾“a term of endearment for a woman”のイメージからして Lippi が相当意識していた女性であると推測出来るのである。

彼は修道院の“day-long blessed idleness” (l. 105) 「日長な恵まれた無為な生活」や彼の嫌いな“Latin” 「ラテン語」で象徴される形骸化された学問に絶望しながらも、“leisure” 「ゆとり」を利用して、いたるところに絵を描き始めた。修道僧たちは、Lippi の幼児に修得した“the realist eye” 「写実主義の眼」によるあまりにも写実的な絵を見て厳しく批難したのである。彼の対象をあるがままに捕える写実的な肉体重視の手法に対して、⁽¹⁰⁾“The medieval preference for art that was formal, cold, and stylized.” 「形式的で冷たく因襲化した絵画への中世の好み」を、強く抱き、画僧 Angelico (1387—1455) や Lorenzo (1370—1425) を賛美する院長及び修道僧たちは、まゆをしかめて厳しく批難し、“the souls of men” 「人間の魂」を描くことのみを力説するのである。

Faces, arms, legs and bodies like the true
 As much as pea and pea! it's devil's-game!
 Your business is not to catch men with show,
 With homage to the perishable clay,
 But life them over it, ignore it all,
 Make them forget there's such a thing as flesh.
 Your business is to paint the souls of men—(ll. 177-83)

この魂の描写と写実的な肉体描写の対立は、回避することが不可能な二律背反の形でますます強化されて行き、Lippi は二つの狭間で苦悩するのである。修道院長と Lippi の芸術観の対立を図式化すれば、中世の退廃的

な時代精神とルネッサンスの新しい精神の胎動、形骸化された idealism と本音を踏まえた realism, リアリティの伴わない神の愛アガペーと永遠なるものを追求する人間の限りなき情熱のエロースにまで敷衍して考えることが出来ると思える。ところで、彼は肉体の美と魂の美の相剋をいかに止揚し、絵画美に於ける霊肉一致の表現をどこに求めたのであろうか。

Why can't a painter lift each foot in turn,
Left foot and right foot, go a double step,
Make his flesh liker and his soul more like,
Both in their order? (II. 205-8)

4. アガペーへの信念とエロースの追求

Lippi は画家として、肉体の美と魂の美の反対の合一をいかに解決しようとしたのであろうか。このことを考察するに当り、私達は次の二点を考えてみる必要がある。一つは、彼の精神の中核をなす根源的なものへの認識と信念であり、他の一つは、彼と Cosimo of the Medici との間に見られるギリシャ精神の果たす役割である。これら二つを順次考えてみることにしたい。

彼は超越的で根源的な実在を直視して次のように述べている。

I always see the Garden and God there
A-making man's wife: and, my lesson learned,
The value and significance of flesh,
I can't unlearn ten minutes afterwards. (II. 266-9)

“Garden”と“God”を常に直視するイメージは、創世記の自由と平安な楽園を想像させる。そこで、愛と力の象徴である神聖な神が、アダムの妻であるエバを創造している場面が浮んで来る。さらに、彼が学んだ確信は、生命的な肉体の価値と意義であったのである。Lippi の根源的な実在たる神の愛と力を“see”「直観」し、神の世界を生命の源泉として生き生きとヴィジョン化する詩的な認識の態度は、彼の詩精神の精髓であるば

かりでなく、Browning 自身の究極の確信でもあったと思える。William Blake も根源的実在のヴィジョンを直視する詩人であり、Lippi とかなり類似しているので、一例を示してみたい。

⁽¹¹⁾
Hear the voice of the Bard!
Who present, past, and future, sees;
Whose ears have heard
The Holy word
That walked among the ancient trees,

詩人は、太古の時代に緑深き歓喜の森を踏み歩いた神聖なるものの声を聞き、⁽¹²⁾ “those worlds of eternity in which we shall live for ever” 「人間が未来永劫に生き続ける永遠の世界」の過去・現在・未来を“sees” 「直観」しているのである。Browning も Blake も、現世の環境を超越したヴィジョンの確信が、強くあったからこそ現実の創造的な実存的生が、可能であったと思えるのである。

私達は、詩人 Browning の神実在の直観と信念について、理解を補うために少し考えておきたい。Browning は、幼少年時代きわめて宗教的な家庭に育ったのである。彼の幼少年時代の宗教体験が、無意識のうちにも、詩人の心の中核に敬虔の念を育ませたことは、伝記作家の指摘するところである。処女作 *Pauline* (1833) の中で、“I saw God everywhere” 「私はいたるところに神を見た」と語り、最後のところで、“I believe in God and truth / And love.” 「私は、神と真理と愛を信じる。」と歌い、Browning は、*Pauline* ですでに神のヴィジョンに達することが出来たのである。*Pippa Passes* (1841) では、“God’s in his heaven— / All’s right with the world!” 「神は天に在り、すべてこの世界は良し」と楽観的な世界観が強く歌われている。⁽¹³⁾ Griffin and Minchin は、神の実在の信念つまり有神論に関して、“Browning was through life an ardent and consistent theist.” 「Browning は、一生を通じて熱心な有神論者であった。」と述べている。また愛妻 Elizabeth Barrett Browning との文通の中でも、⁽¹⁴⁾ “The rest is with God—whose finger I see every minute of my life.” 「あとは神にまかせます。私には、毎瞬毎瞬神の指が見えます。」 Browning

の他の幾多の宗教詩にもみられるように、彼は生涯を通じて、知的直観により、神聖なる神の存在を強く信じていたのである。*In Memoriam*の中で Tennyson が、科学と信仰の間を懐疑的に動揺し続けた態度とは異なっていたのである。

第二番目の問題として、Lippi と Cosimo of the Medici との間に見られるギリシャ精神の果たす役割について考えておきたいと思う。Lippi のパトロンである Cosimo of the Medici について、ブルクハルトは、次のごとく述べている。¹⁵³「商人として、また地方の党首としてコージモの地位にあり、そのうえ、およそ物を考え、研究し、書くすべての人々を、自分の味方としてもっている者、生まれながらにしてフィレンツェの第一人者であり、かつて加えてその教養によって最大のイタリア人と見なされる者、それこそ事実上の一君主である。」高階秀爾氏も『フィレンツェ』の中で¹⁵⁴、「商売においては食欲で、仇敵に対しては容赦なかったコジモも、芸術家に対してきわめて寛大であった。ゴッツォーリと並んでコジモが特にその才を寵愛した画家に、修道僧のフラ・フィリッポ・リッピがいた。」と伝えている。伝記作家 Vasari が語る放蕩な天才画家 Lippi と寛大な保護者 Cosimo of the Medici との関係は、本詩の中に素材として潤色されて表現されている。¹⁵⁵この箇所は、注として明示しておきたい。Lippi と Cosimo との親密な関係において、Cosimo は、「プラトンの哲学に古代の思想界のもっとも美しい開花を見てとり、自分の周囲にこの認識を行きわたらせ、かくして人文主義の内部に古代のいっそう高い第二の新生をもたらしただという特別の名誉をになっている。」と Lippi は信じ、Cosimo の「古代の精神をキリスト教的精神をもって貫く」¹⁵⁶考えに、かなり影響されていたと理解されるのである。つまりプラトン哲学とキリスト教の倫理観の結合、エロースとアガペーとの有機的生命的な関係を、彼は本詩の中で表現しているのである。このことはブルクハルトの次の説明によって、あますところなく述べられていると言える。

¹⁵⁰ 目に見える世界は神が愛から創造したものであり、それは神の中にあらかじめ存在する原型の写しであって、神はそれを永遠に動かし、創造しつづける者としてとどまるであろうという観念が生じてくる。個々の人間のたましいは、まず神を認識することによって神を自

己の狭い限界の中に引き寄せることもできるが、しかし神への愛によって自己を無限に拡大することもできる。そしてその時こそ地上の至福が得られる。

アガペーの認識とエロースの追求を、自己体験と Cosimo との関わりによって、獲得して来た Lippi にとって、神と現実世界との関係は、いかなる様相をなすものであろうか。これは、今までの神の存在を直観する彼の認識態度から理解されるものである。彼の言葉を用いれば、現実世界は、“God’s works” (l. 295) 「神の創造物」なのである。

…, you’ve seen the world
—The beauty and the wonder and the power,
The shapes of things, their colours, lights and shades,
Changes, surprises,—and God made it all! (ll. 282-5)

神の作品である自然の中には、美、驚異、力が顕現されている。画家の眼には、万象の形体、色彩、光線、陰影、微妙な変化、驚きが生き生きと映るのである。画家は、「クリスマス前夜」において歌われているように、“The many motions of his spirit, / Pass, as they list, to earth from heaven” (xxii. 1309-10) 「神の霊の多くの働きを、好むがままに、天から地へと通わせている」神の大きな力を認知するのである。

私達は、Lippi が抱いていた画家の使命を考えてみたい。画家は、自然界に躍動する精彩なる“beauty” 「美」を、追求し描写しようと努める。画家が、美の根源を求める衝動に駆られる限りない魂の欲求は、プラトンが、『饗宴』で主張する愛エロースと考えることが出来る。画家は、エロースによって、神の創造物の中に宿る最高の美を求めることになる。

If you get simple beauty and nought else,
You get about the best thing God invents: (ll. 217-8)

この時、Lippi にとって、自然は本来の虚実ではない真相を本来の意味として現わしてくるのである。

This world's no blot for us,
Nor blank ; it means intensely, and means good :
To find its meaning is my meat and drink. (ll. 313-15)

彼の対象をあるがままに描写する写実的な芸術上の信念は、この詩句の中に力強く描写されている。私達が絵画を見ることの意義は、今まで百回も物事の傍を通り過ぎていながら、見過ごしていた物でも、一度画家の絵筆に触れると、初めてその美に驚き愛するようになると言うのである。

……, don't you mark? we're made so that we love
First when we see them painted, things we have passed
Perhaps a hundred times nor cared to see ;
And so they are better, painted—better to us,
Which is the same thing. Art was given for that ;
God uses us to help each other so,
Lending our minds out. (ll. 300-6)

Browning の自然の認識の方法は、Wordsworth の汎神論的なものとは異なり、J. Ruskin にたいへん似ていると言える。Ruskin は、自然を神の制作品と考え、画家は、神の現われである神聖な形態の本質美を、追求し描写することが、最高の芸術の使命であると考えていたのである。

Lippi の自然を捉える考え方をみて来たので、次に彼の人間に対する見方を考えてみたい。Lippi にとって、自然の持つ意味は、人間の美を表現するための絵の額縁で、あくまで二次的なものであり、人間が主なのである。ルネッサンスが、個人の発見であり、さらに人間の発見の時代であってみれば、Lippi が、画題のモデルとして、人間を選択していることは当然とも言えるものである。彼は、ほとんどの場合、キリスト教に係わる世界の人物を画題のモデルとして採っている。大切なことは、これら諸々の人物が、すべて現実に存在する生身の人間であると言う事実である。画家は、これらの実在する人物に、キリスト教の思想の枠組をはめ込むのである。例えば、Lippi の咽喉もとをおさえている夜警の警官を“Judas”「ユダ」と捕える。または、片手に手提ランプをさげ、他の手

に矛を持つ若い警官を, “the slave that holds/John Baptist’s head” (ll. 33-4)「バプテスマのヨハネの首をさげている奴隷の姿」と直視するのである。Lippi がキリスト教世界の人物を登場させる背後には、彼のキリスト教理解の深さもさることながら、現実のエロースを生きる人間にとってキリスト教的な倫理の重要性が提示されていたのかも知れない。

私達が最も重視しなければならない、Lippi の人間に対する関係は、修道院長の姪に対するものである。彼の彼女に対する愛に、回避することの出来ないエロースの特質が内包されているのである。彼の描写する彼女は, “that white smallish female with the breasts” (l. 195)「あの色白の小柄な、胸の豊かな女性」で、美しく豊かな官能性を具えており、本詩の冒頭において、修道院に忍び込む“a wee white mouse” (l. 10)「小さな白鼠」と同一視される女性であると思える。彼女には, “Who went and danced and got men’s heads cut off” (l. 197)「出かけて、踊って、男どもの首を切らせた女」で、不倫な女性の本性を象徴する, “Herodias” (l. 196)「ヘロディア」なる面がある。つまり、彼女は、美しい官能性と不倫で破壊的な悪の二面を具備している女性なのである。しかし、Lippi にとって彼女は、彼の生命と芸術を守る“patron-saint” (l. 209)「守護の聖人」なのである。このことは、一体何を意味しているのであろうか。本詩には、直接述べられてはいないけれど、上記のことを理解するために、Vasari の説く Lippi と愛する女性とのエピソードを参考上略述してみたい。

彼が、Proto の Santa Margherita の修道院の尼僧たちのために依頼されて、祭壇画を描いていた時、尼僧たちのあいだに Lucrezia Buti と呼ばれる美しい修道女を見つけた。彼は、彼女をマドンナのモデルとして許してもらうために、尼僧長に頼み込み、願いがかなって、彼女をモデルとして描いた。しかし彼女を深く愛するようになり、尼僧長や父親の反対にもかかわらず、彼女を連れ出し同棲したと伝えられている。二人の間には、有名な画家となった Filippino Lippi が生まれたのである。Fra Lippo Lippi の絵に出て来るマドンナは、いずれも Lucrezia をモデルにしたものであったと言われている⁶⁰。

詩人 Browning は、この Lippi—Lucrezia の愛の事件を, “that white smallish female with breasts” (l. 195)「あの色白の小柄な、胸の豊かな

女性」として、詩中に具体的な名前を廃して、組み込んだものと推測することが出来る。上記のエピソードと“patron-saint”「守護の聖人」から理解されるように、Lippiの彼女へ対するエロースの方向は、現世的地上的なものから、verticalに天的で神聖なものへと上昇し昇華していることを意味していると解することが出来る。人間の魂の根源的実在を追求して、horizontalな方向から verticalな方向へ上昇する神聖なエロースは、Browningの処女作以来終始追求されて来た主要なエロース・モチーフであると言える。詩人は、“the development of a soul”「魂の発展」が示すように、限りなき魂の進展を、エロース弁証法とも言える方法で探求し続けたのである。私達は、本詩に於けるエロースについて、最後に再び述べることになる。

ところで、Lippiの彼女の美追求の最終的に到達した認識は、自然界のものと同等的なものなのであろうか。彼が、彼女の姿を描くに関して次のように述べている。

Can't I take breath and try to add life's flesh,
And then add soul and heighten them threefold? (ll. 213-4)

²⁴⁾ Donald S. Hair は、“breath” “life's flash” “soul”の各語を評して次のような説明を加えている。つまり、“breath”は、“physical existence”「肉体」を意味し、“life's flash”は、“to make it (=material) lifelike”「肉体に生命を吹き込むこと」、 “soul”は、“the essence of life itself, something universal and unchanging”「生命自体の本質、宇宙的で不変なるもの」を意味すると言う。ここに、私達は、肉体と魂と神の三味一体を認めることが出来ると思える。本来の生命の閃きは、“beauty with no soul” (l. 215)「魂のない美」ではなく、根源的で宇宙的な実在と深い関係をなすものでなければならない。自然の世界にあっては、“soul”「魂」なる語を認めることがなかったのに対して、人間、特に Lippi の愛する修道院長の姪の箇所には、“soul”「魂」が強調されている。画家は、肉体の美を通して、魂に内在する美を追求し、表現することによって、神聖で光明な永遠の世界を最終的に描き出す。Andrea del Sarto は、妖麗な妻への官能的エロースに執着していたのであるが、Lippi は、院長の姪の魂の追求により、

天上のエロースにまで達することが出来たのである。Wordsworth が、自然の霊に絶大な確信を抱いていたとすれば、Browning は、人間の“soul”「魂」に、自然よりも信念を置いていたと思えるのである。

5. 芸術観と倫理観の融合

Lippiが、心中で描いていた、アガペーとエロースのモチーフを統一融合させる絵とは、一体いかなる構図からなるものであろうか。フローレンスのAcademia delle Belle Artiにある“Coronation of the Virgin”「聖母の戴冠」がそれである。当時この絵を見たBrowningは、強烈な感動を得たと思われる。この絵の構図は、中央に神を配し、聖母と聖子とは、天使たちの群、百合の花持ち、きらびやかな色白の聖服をつけた幾多の顔に取りかこまれている。聖ヨハネや聖アンブロース、忍耐を象徴するヨブまでが、それぞれ描かれている。あたりには、芳香が漂い、これらの神聖な人々が、静かに祈りをささげている。この神聖な場所へ、全く思いもよらぬ時に、片隅から、暗がりの階段を登って、光明と音楽と楽しそうな話し声のする神の国へ現われたのは、ほかでもないLippiその人である。

……a dark stair into a great light
Music and talking,……(ll. 362-3)

彼は、この光彩に輝く神聖な世界を、おそろおそろ垣間見るのである。この世界こそ、彼の限りない魂の情熱が求めた最善美の究極のヴィジョンなのである。

私達は、“dark stair”に注目する必要がある。“dark”が意味する心象は、いろいろ考えられるけれども、本詩のコンテクストからして、ルネッサンスへ向う中世の残照であり、修道院や警官たちの暗い閉ざされた現実世界であり、Lippiの芸術への苦悩の暗示でもあろう。または、あまりにも地上的で現世的な闇の世界に執着する人間すべてへの風刺とも理解出来るものである。“dark”な“stair”「階段」を登り、光彩の世界を見る心の動きは、プラトンのエロース論のごとく、永遠なるものを求めて上

昇する精神の高揚のアレゴリーである。上昇の極みで、プラトンが直視した、不滅なるものの真相は、“a nature of wonderous beauty”「すばらしき美の本質」であり、“beauty absolute, separate, simple, and everlasting”「絶対で、独立し、純一で、永遠なる美」であったのである。J. Keatsをして、“Beauty is truth, truth beauty”「美は真なり、真は美なり」と歌わせたのも、P. B. Shelley をして、次のごとく絶叫させたのも、この不死の神聖な美の世界であったと言える。

but the pure spirit shall flow

Back to the burning fountain whence it came

A portion of the Eternal, which must glow

Through time and change, unquenchably the same.

ところで、Lippi の芸術観と倫理観を考える場合、彼の無垢清浄のまばゆい光彩の世界の根源に、高度に純化され聖化された神のヴィジョンを直観していることは、誠に意味深いことなのである。Keats や Shelley の場合には、崇高な美の極限に無限の虚空につながるものが内在している。Lippi は、光彩の世界を見て、“Mazed, motionless and moon-struck” (l. 364)「眩惑され、身動きできず、気が狂ったように」一瞬恍惚状態を体験する。彼のエクスタシーには、どこか覚めた意識がみられるのである。テニソンが、亡友ハラムの手紙を読み、陶醉感に陥いる場合も覚めたものであることを思い起すのである。

Lippi は、恍惚体験が覚めるとともに、ある存在に気付くのである。ある存在とは、私達がすでに見て来たように、“a soft palm” (l. 371)「やわらかい手」をした“a sweet angelic slip of a thing” (l. 370)「天使のような人」とは、院長の姪なのである。彼が、彼女の神聖なエロースに導びかれて、horizontal な地上の世界から、vertical な天上の世界へ参入出来たことを知るとき、彼女こそ彼の根源的な実在追求への“the rescuer”「救い人」であったと言える。彼女は、彼の芸術性と倫理性を最高の極みまで導いてくれる“mediator”「仲立ち」をなす存在なのである。そのために、彼を“the celestial presence” (l. 372)「天国の人々」へ紹介するのも彼女であるし、彼の絵の才能を述べるのも彼女である。彼は、彼女

の深い愛と理解に感謝し、恥ずかしくなり、天使の翼の陰にかくれるのである。ここには、画家 Lippi の純粹無垢性がよく示されている。彼の心は、童子のように、天使と同格と言える程清純なのである。最後に到っても、彼は、愛する“the little lily thing” (l. 385) 「可愛い百合のような人」の手は離さないで、深い愛の絆として握っている。

“Coronation of the Virgin” 「聖母の戴母」に到って、Lippi は、神の光彩であるアガペーと光明の世界とを求めるエロースとの融合統一を、愛する女性への神聖なエロースをもって、成就することが出来たのである。

6. おわりに

Lippi の写実主義には、“the love of God” 「神の愛」であるアガペーと“the love of the world” 「現世の愛」であるエロースが、力強く躍動している。実在の根源である神聖な神の愛アガペーが、自然と人間世界へ顕現し、画家は絶えざる美を追求する情熱の愛エロースにうながされて、根源の光彩へと上昇して行くのである。その時、画家は、美のための美を極限まで追求して行くのであるが、美追求の背後に、普遍的な実在者たる神聖なもののヴィジョンを、はっきりと捕えているのである。この審美観と倫理観は、最も深い真の世界において、有機的にして生命的に、しかも分離することなく同時に美的かつ倫理的なよろこびの世界を創造すると言える。そのためには、アガペーとエロースの絶えざる流出と流入の劇的な運動が、なされる必要があると思える。Lippi が、警察の頭を相手に語った芸術観も終りに近づく。東の空も明るくなり、“There’s the grey beginning.” 「そろそろ夜明けだ。」と語り、Lippi は、家路に向かうのである。黎明は、新しいものの創造、新生を暗示していると解されるのである。

注

- (1) Samuel S. Southwell, *Quest for Eros* (The University Press of Kentucky, 1980), p. 216.
- (2) Denis de Rougemont, *Love In The Western World* (Pantheon, 1956), p. 68.
God—the real God—has been made man—a real man. Darkness as

'comprehended' the light in the person of Jesus Christ. And every man born of woman who *believes* this is born again of the spirit here and now—dead to himself and dead to the world in so far as self and the world are sinful, but restored to himself and to the world in so far as the Spirit wants to save them.

Thereupon to love is no longer to flee and persistently to reject the act of love. Love now still begins beyond death, but from that beyond it returns to life. And, in being thus converted, love brings forth our *neighbour*.

(3) *Ibid.*, pp. 61-2.

Eros is complete Desire, luminous Aspiration, the primitive religious soaring carried to its loftiest pitch, to the extreme exigency of purity which is also the extreme exigency of Unity. But absolute unity must be the negation of the present human being in his suffering multiplicity. The supreme soaring of desire ends in non-desire. The erotic process introduces into life an element foreign to the diastole and systole of sexual attraction—a desire that never relapses, that nothing can satisfy, that even rejects and flees the temptation to obtain its fulfilment in the world, because its demand is to embrace no less than the All. It is *infinite transcendence*, man's rise into his god. And this rise is *without return*.

- (4) M. Arnold, *Culture and Anarchy* (Tokyo Kenkyusha, 1968), p. 164.
- (5) 拙稿「R. Browning の“Andrea del Sarto”における詩構造—空間と時間とエロスを中心に—」を参照。(北星論集第17号)
- (6) C. H. Herford, *Robert Browning* (William Blackwood and Sons), p. 102.
- (7) Helen Archibald Clark, *Browning Italy* (Haskell House Publishers Ltd., 1973), p. 246.
- (8) Ad de Vries, *Dictionary of Symbols and Imagery* (North-Holland Publishing Company, 1974), see “hole”, p. 254.
- (9) *Ibid.* See “mouse”, pp. 330-1.
- (10) Donald S. Hair, *Browning's Experiments with Genre* (University of Toronto Press, 1972), p. 109.
- (11) W. Blake, *Songs of Innocence and Experience*, “Introduction”, ll. 1-5.
- (12) *Ibid.*, *Milton*, Preface.
- (13) Griffin and Minchin, *The Life of Robert Browning* (Archon Books, 1966), p. 294.
- (14) Letters of Elizabeth Barrett Browning, Vol. 1. p. 133.
- (15) ブルクハルト【イタリア・ルネッサンスの文化】、柴田治三郎訳【世界の名著】

R. Browning の絵画詩 : *Fra Lippo Lippi*

45, 中央公論社, p. 270.

(16) 高階秀爾著【フィレンツェ】, 中央新書118, p. 20.

(17) Helen Archibald Clark, *Browning Italy*, pp. 247-8.

"It is said that Fra Lippo Lippi was much addicted to the pleasures of sense, insomuch that he would give all he possessed to secure the gratification of whatever inclination might at the moment be predominant, but if he could by no means accomplish his wishes, he would then depict the object which had attracted his attention. It was known that, while occupied in the pursuit of his pleasures, the works undertaken by him received little or none of his attention; for which reason Cosimo de' Medici wishing him to execute a work in his own palace, shut him up that he might not waste his time in running about, but having endured this confinement for two days, he then made ropes with the sheets of his bed, which he cut to pieces for that purpose, and so having let himself down from the window, escaped, and for several days gave himself up to his amusements. When Cosimo found that the painter had disappeared he caused him to be sought, and Fra Lippo at last returned to work, but from that time forth Cosimo gave him liberty to go in and out at his pleasure, repenting greatly of having shut him up, when he considered the danger that Lippo had run by his folly in descending from the window; and ever afterwards laboring to keep him to his work by kindness only, he was by this means much more promptly and effectually served by the painter and was wont to say that excellencies of rare genius were as forms of light and not beasts of burden".

(18) ブルクハルト【イタリア・フネサンスの文化】, p. 270.

(19) Ibid. p. 528.

(20) Ibid. p. 578.

(21) Helen Archibald Clark, *Browning Italy*, pp. 247-8.

(22) Donald S. Hair, *Browning's Experiments with Genre*, p. 109.

(23) Plato, *Symposium* translated by B. Jowett (D. van Nostdoand Company, Inc. 1942), p. 202.

(24) Ibid. p. 202.

(25) J. Keats, *Ode to a Grecian Urn*, l. 49.

(26) P. B. Shelley, *Adonais*, 38: 338-41.

(27) Tennyson, *In Memoriam*, XCV, ix-xi.

R. Browning's painting poem :

Fra Lippo Lippi

—Religious and Artistic Ideas through Agape and Eros—

Tadao NOGUCHI

1. Preface
2. On the framework of the poem
3. The artistic awakening and agonies of Lippi
4. Lippi's belief in Agape and search for Eros
5. The unity of religious and artistic ideas
6. Conclusion

“Fra Lippo Lippi” is said to be one of Browning's more successful dramatic monologues and written in blank verse, including *stornelli*, or flower-songs. On reading the poem, we may consider that Lippi, who has a cheerful character, is going to challenge to reconcile both artistic and religious opinions. Therefore he tries to cultivate his human soul as well as his artistic skill throughout the mental agonies of his life.

The present writer attempts in this paper to search for Browning's artistic and religious opinions from the points of Agape and Eros. In the closing lines of the poem of Lippi's “Coronation of the Virgin”, Lippi can recognize his identity which is the artistic and religious unity in the core of his soul.